



ライスワックス



「10年後を見据え、天然・合成ワックスの両面でポートフォリオを拡充し、サステナビリティと安定供給を両立させたい」

日本精蝋株式会社 代表取締役社長 今野 拓也

日本精蝋：100年の叡智で紡ぐ、次世代ワックスの革新

創業約一世紀を誇る日本精蝋株式会社は、ワックス業界のフロントランナーとして、多様化と持続可能性を軸に、環境対応型製品の開発に果敢に挑戦している。By Sean McBride

日本のワックス業界に君臨する日本精蝋株式会社。1927年の創業以来、約一世紀にわたり培ってきた技術と知見は、同社の揺るぎない基盤となっている。多様な産業の縁の下の力持ちとして、高品質ワックスの開発・製造に進進してきた同社が、今、カーボンニュートラル時代の到来を見据え、新たな挑戦を始めている。

「ワックスとは、20から40個の炭素原子を含む炭化水素分子の混合物からなる複合体で、室温で固体を呈する物質です」今野社長はこう語り、その用途の多様性を強調する。保湿性、保温性、撥水性、電気絶縁性といった特性を有するこの素材は、産業界における「縁の下の力持ち」として、その存在感を示してきた。

一般にワックスといえば、靴墨やヘアスタイリング剤、車の艶出しなどを思い起こさせるが、活躍の場はそれらにとどまらない。最も原始的でありながら、今なお重要性を失わないのがキャンドルである。国内需要は減少傾向にあるものの、グローバル市場は堅調な伸びを示し、パンデミック下でもその需要は衰えを見せなかった。

ワックスの用途は、実に多岐にわたる。自動車タイヤの劣化防止、紙・包装材の耐水性向上、食品業界における包装紙やガム製造、建設業界での接着剤、医療分野における軟膏や外科手術用具、さらにはリハビリテーション器具にまで及ぶ。その汎用性は、まさに現代産業の縁の下の力持ちと呼ぶにふさわしい。

「当社の競争力の源泉は、華氏115度から240度まで、5度刻みで融点を調整できる高度な技術力にある」と今野社長は胸を張る。この精緻な温度制御技術により、顧客の細やかなニーズに応えることが可能となった。さらに、ワックス中の油分

含有量を0.1%にまで低減する技術は、業界の新たなスタンダードを確立したといえよう。

しかし、化石燃料由来のワックスが環境に与える影響は看過できない。2050年カーボンニュートラル実現を掲げる日本において、これは日本精蝋にとって重大な挑戦であると同時に、新たな飛躍の機会でもある。同社は生分解性ワックスの開発



や、既存製品の油分含有量削減を通じて、環境負荷の軽減に尽力しているという。今野社長は「脱炭素社会への移行は不可避であり、化石燃料依存からの脱却は急務。しかし、需要が存在する限り、高品質ワックスの供給責任を全うします」と力強く語る。

同社の未来を担う有望分野の一つが、ライスワックスに代表される植物性ワックスの開発だ。この技術革新は、製品ポートフォリオの多様化と脱化石燃料を同時に実現する戦略的施策といえる。「ライスワックスの開発は我々の重点プロジェクトであり、将来的には化石燃料由来ワックスの代替となり得ます」と今野社長は展望を語る。

新たな成長要素として期待されるのが、ワックスエマルジョンだ。ワックスと水を融合させたこの革新的製品は、特に建設業界において表面スプレーとしての需要が急増している。旺盛な需要に応えるべく、同社は生産能力の拡充に注力している。

日本精蝋の事業戦略の要となっているのが、研究開発だ。天然ワックスと合成ワックスを軸に、製品革新と品質向上に進んでいる。「現在、我々の事業の9割は化石燃料由来ワックスが占めていますが、非化石燃料への転換と多様化を進め、顧客ニーズの変化に即応できる体制を構築している」と今野社長は語る。

創業100周年を迎えた日本精蝋は、環境負荷の大幅な低減と高品質・革新的ワックス製品の供給の両立を目指している。「10年後には、天然ワックスと合成ワックスのポートフォリオをさらに多様化し、持続可能かつ安定的な供給体制を確立したい」今野社長の言葉には、次の100年を見据えた確固たる決意が感じられた。

日本精蝋は、ワックス業界のフロントランナーとして、イノベーションと持続可能性を両輪に、新時代の産業の基盤を支える存在として、その存在感をさらに高めていくことだろう。

注：本インタビューは2022年6月2日に実施されたものです。当時、今野拓也氏が日本精蝋株式会社の社長を務めていましたが、2024年7月現在、瀧本丈平氏が社長職に就いています。

 NIPPON SEIRO CO., LTD.
www.seiro.co.jp/en

